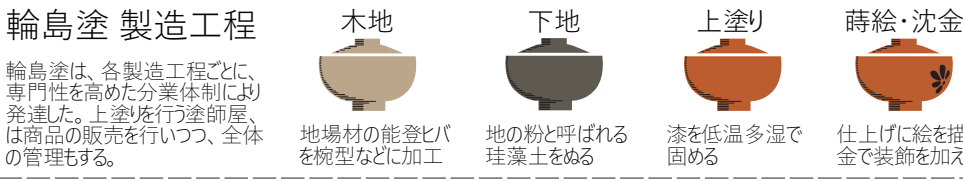
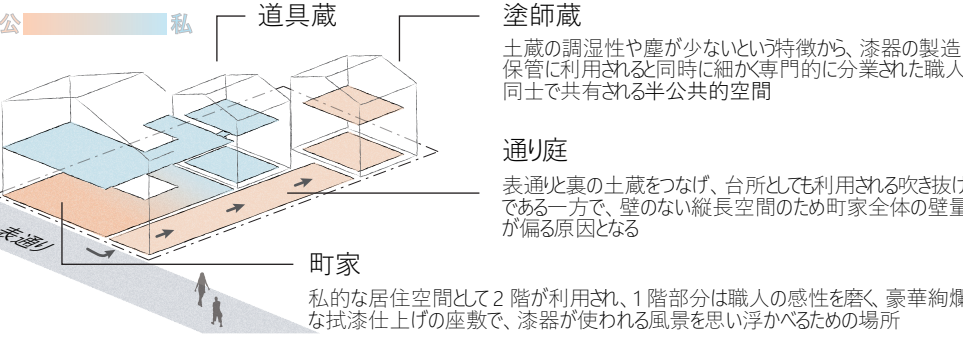


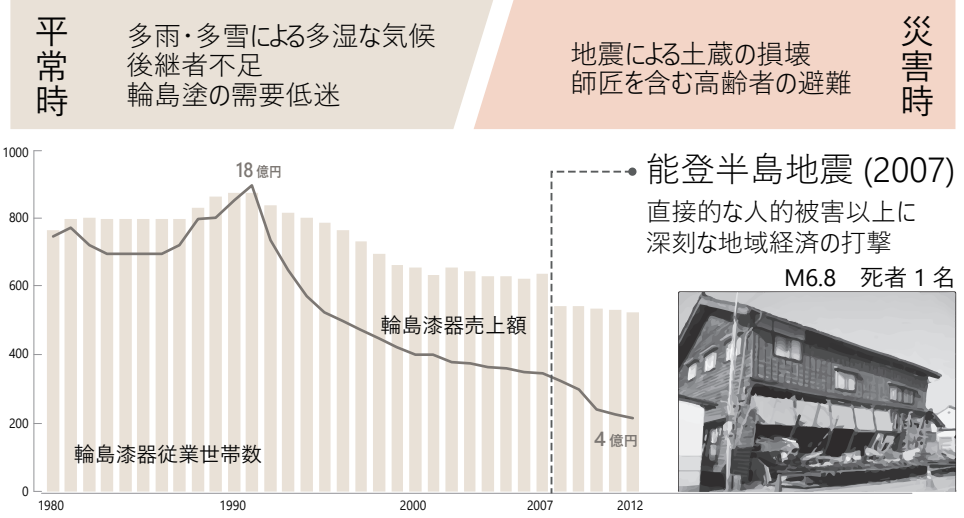
01 輪島の町家ー塗師屋造り

輪島には独特の町家がある。輪島塗は、日常的に使われる工芸として、職人の感性を磨くべく、通り沿いには拭漆仕上げの住空間が設けられ、裏に作業場の土蔵が作られた。塗師は輪島塗製造の全体を管理する職人で、他の職人たちが多く訪れるため、裏の土蔵も開かれた場である。このよな、輪島特有の町家形式は、「人前職後」の塗師屋造りと呼ばれる。



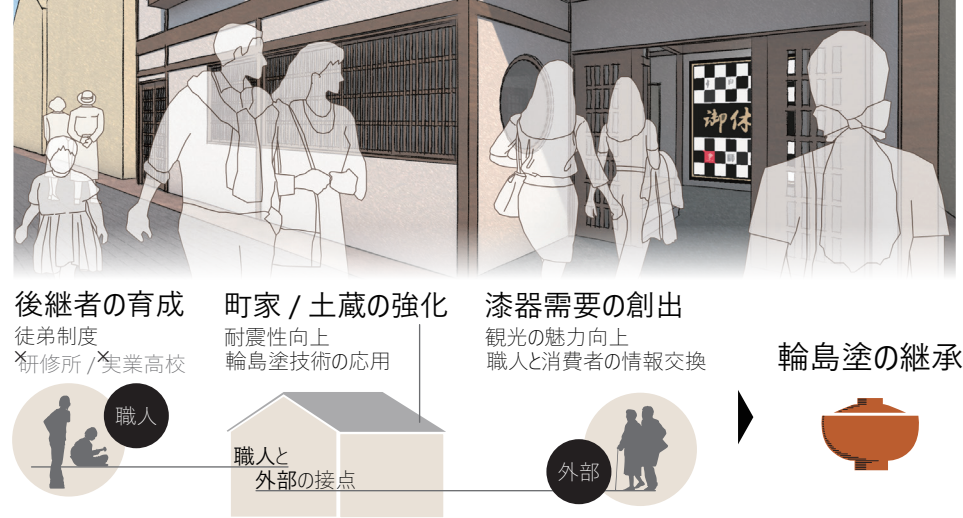
02 輪島塗の課題

もともと漆器の製造に適した多湿な気候も、建物の劣化を早め、地震時の耐力不足に繋がる。バブル期以降、需要減少の一途をたどる。またそれに伴って後継者不足になり、従業者が減少している。これに拍車をかけたのが、能登半島地震である。人的被害や復旧復興の遅れ以上に、産業の確立こそが最大の課題である。産業があればこそ、復興がはまる。



03 提案内容

提案するのは、輪島伝統の町家形式を踏襲しつつ、災害への対策を施すことで、後継者育成に最も有効な徒弟制に合う、二世帯住宅である。通り沿いの座敷と裏の土蔵がオープンな空間で、座敷では地域と1ターンで弟子入りする人の交流の場や、実際に使われる漆器を観光客も感じる場になる。土蔵は職人同士や、観光客との交流が生まれる。



輪島は強しや土までも

ー地震に強く、輪島塗をつなぐ、輪島の町家ー

日本海に突き出した輪島は、江戸時代から続く日本を代表する漆器の産地である。能登半島地震で被害の集中した土蔵は、輪島塗の製造において非常に重要な役割を担う。土蔵を中心とした伝統的な町家をもとにした、地震に強い現代の町家を提案する。地方で今求められるのは、産業振興につながるフェズリーな住宅である。

氏川拓郎 尾野裕太 橋富一博